

<書評>

星野文子著『ヨネ・ノグチ——夢を追いかけた国際詩人』  
(彩流社、2012)

大野 ロベルト

ヨネ・ノグチこと野口米次郎(1875-1947)の研究は、近年なかなかの盛り上がりを見せている。本書に序文を寄せている東京大学名誉教授の亀井俊介氏らが1960年代に立ち上げたヨネ・ノグチ・ソサエティによる熱心な活動はいったん下火になったものの、その総決算とも言える『ヨネ・ノグチ英文著作集』は2007年に改めて亀井氏の編集で刊行されている。その後も、例えば第34回サントリー学芸賞を受けた堀まどか著『「二重国籍」詩人 野口米次郎』(名古屋大学出版会、2012)があり、また2010年には松井久子監督による映画「レオニー」が封切られ、彫刻家イサム・ノグチを産んだ女性であるレオニーの視点から、この「国際詩人」を見つめ直す試みもなされている。このような流れを受けて新たに刊行された本書は、ヨネ・ノグチ研究にさらなる拍車をかけるきっかけとなるかもしれない。

本書は、主に1893年から1904年までの11年間を米英で過ごしたノグチが、現地の友人知己に書き送った英語の書簡を軸に、その軌跡をたどる構成となっている。若干の西洋文学の知識と心許ない英語力だけを頼りに、明治の青年がほとんど無一物でサンフランシスコに渡り、書生や邦字新聞社の翻訳係、あるいは雑用係の居候として口を糊しながら、ついに英語で詩集や小説を世に問うに至る過程は劇的というほかなく、なぜこれほどの傑物がいまや知る人ぞ知る詩人の地位に甘んじているのか、という疑問が自然と湧いてくる。そしてその理由こそ、ノグチをさらに興味深い人物にしていると思われるのである。

まず注目すべきは、ノグチについてまわる「国際詩人」という評価である。これを定着させたのは、他ならぬノグチ自身が帰国後の1921年に初めて日本語で書いた詩集『二重国籍者の詩』で述べている次のような慨嘆であろう。「僕は日本語にも英語にも自信が無い」、そして「日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ……」。つまりこの場合の「国際詩人」とは必ずしも前向きな評価ではなく、むしろ一つの文化に誇らかに所属し、その文化の言語で存分に語るといって、言ってみれば「当然の権利」を剥奪された状態を指しているのである。

このことはすぐさま、そのような「当然の権利」がまやかしに過ぎないことを示唆しているようにも思える。ロンドンで評論家のマイケル・ロセッティの一家に招かれたノグチが、彼らのほうが自分よりも浮世絵などの日本美術に詳しいことに驚きと羞恥を感じたというエピソードに如実に現れているように、人間は自国の文化や言語だからといって無条件にそれを習得できるわけではない。普段われわれは、それがあまりにも身近であるために、なんとなく理解しているつもりになっているだけなのである。ノグチのように祖国から離れるという経験は、否応なくその現実を突きつけずにはおかない。

ここで浮き彫りになる「国際人」という言葉の二重性は、現代社会に対する痛烈な皮肉とも取れる。統計的に見て海外への留学を志す若者が減っているとはいえ、親の仕事の都合などで幼少年期を海外で過ごすケースや、例え日本で育ってもいわゆるインターナショナル・スクールに通い英語で教育を受けるケースは、かなりの数に上る。彼らは一般的な日本人にはない大胆さや批評的な思考力、そして高い語学力を買われ、世界的な企業に就職することもしばしばである。したがって社会的に見れば、彼らはエリートということになるのだろう。しかし、彼らの多くがノグチとまったく同様の悩み、すなわち「日本語にも英語にも自信がなく、日本人にも西洋人にもなりきれない」というような思いを抱き、自分がどこにも所属していないような孤独感に苛まれている例は少なくないのである。(敢えて付言すれば、評者もそのような「二重国籍者」の一人であり、悩める同輩を間近で見てきた者である。) グローバル化という言葉ばかりが一人歩きしている

21世紀においても、真の国際人たることとは何なのか、という問題は未だに充分検討されていないのが現状であろう。

次に、もう一つ気になるのが、「日本初の英詩人」としての評価が前面に出ているノグチだが、果たしてどれだけの文学を残したのか、という大きな問題である。

本書では折りに触れノグチの詩が紹介され、原文の英語と、後にノグチ自身がそれを和訳したものが対照されている。両者を見比べてみると、少なからぬ相違があることに驚きを禁じ得ない。例えば、ごく初期の作品である“The Brave Upright Rain”の末尾は、

Resignedly, the fleeting mountain of tired cloud creeps into the  
willow leaves – washed hair of palace-maiden of old.

Lo, the willow leaves, mirrored in the dust-free waters of the pond!

となっているが、これは和訳版の「雨」では、

疲れ切つた雲の山は左右に揺れる柳の葉のなかへはひつて仕舞つた  
が、この柳の葉は絵に描いた官女の洗髪に似てゐる。塵のない小池の鏡  
に映つてゐる平安時代の官女の髪洗をご覧ください。

となっている。二つのスタンザが一つになっている上、動詞や形容詞がかかっている範囲も違い、名詞が使われる回数などにも相違がある。ノグチの場合は英詩が先行しているわけだが、和訳は原文の再解釈というよりも、むしろ説明に過ぎないようなぎこちなさすら感じられる。

カリフォルニアの詩人ウァキーン・ミラーの許に4年間も寄食していたノグチだが、ミラーには詩人としての生き方を学びこそすれ、実際の詩作を習うことはなかったという。彼は独学を大切にした詩人であり、またかなりの自信家でもあった。その彼の詩作哲学の一つは、言葉に余白を持たせ、書きすぎないという

ことであり、彼は欧米の詩人にはそれができていないと考えていたようだ。これは言語の構造上、明確な形容を促しやすい英語に対し、より抽象的で両義的な表現を許容する日本語のネイティブ・スピーカーであるノグチが抱く反感としては、しごく納得のゆくものと言える。そして上に引用した詩を見るかぎり、ノグチはやはり英語で書いてはじめてその哲学を実践することのできた、変わり種の詩人であったと言えるだろう。ノグチの詩を英語で読むと、まるで外国人が和歌や俳句を訳したものを読んでいるような気分になるのである。

しかし現実問題として、ノグチの英語が未熟なものであったと思われる点も無視できない。たしかに詩に関しては、とくにノグチがある程度の経験を積んでからのものを見ると、あくまでもスタイルとして故意に朦朧とした表現を選んでいるとも見なせるだろう。だが本書の付録として収録されているノグチの書簡の原文を読むと、ノグチの英語力にかなりの限界があったことは疑いを容れないのである。(ただしそれは、見映えはしないがきちんと通じる文章である。)

それでも、まさにそのような「英語らしからぬ英語」がノグチの詩を有名にした主な要因である以上、ノグチが戦略的に自身の未熟な語学力を武器にしていた可能性は充分にある。現地の友人に文法上の誤りなどを添削するよう依頼する手紙は多く残っているが、もしノグチの英語が完璧な、つまり何の変哲もない英語になってしまったら、ノグチの作品がこれほど注目を浴びることはなかっただろう。「東洋人が独特の英語で書いた詩」というところに商機があったのであり、ノグチもこの点に無知ではなかった。

現にロンドンで自費出版した詩集『東海より』(*From the Eastern Sea*)の扉には、敢えて著者の欄に“YONE NOGUCHI (JAPANESE)”と記載している。またアメリカで出版した小説『日本少女の米国日記』(*The American Diary of a Japanese Girl*)は、日本から船で米国に渡る少女に自身の体験を重ねるといふ、おそらく『土佐日記』に着想を得て書かれた小説であるが、ここではノグチは著者の名前をMorning Glory(朝顔)としている。これは『源氏物語』の登場人物を彷彿とさせる、この小説の語り手の名である。このようにノグチは、異邦人である自身の

特色を全面に出し、読者に謎めいた作者の正体をちらつかせることで、単に作品を発表する以上に耳目を集めることに成功したのである。

以上のように本書は、明治の日本人が海外で文学作品を発表するという空前の事業を、書簡をよりどころに淡々と報告しながらも、そこから背景にある様々な事象へと読者の想像を導くものとなっている。豊富な書簡のなかには著者がその足で発掘した新資料もあり、その意味でも貴重な一冊と言える。しかし憾むらくは、多くの書簡を紹介しようと配慮するあまり、地の文に現れる著者の主張がやや控えめに過ぎる点であろう。あとがきによれば、本書は著者の修士論文に基づいており、現在はより網羅的な博士論文を執筆中とのことである。おそらく次代のヨネ・ノグチ研究の第一人者への道を歩むことになる著者には、今後はより明確な切口で、著者ならではのノグチ像を提出することを期待したい。

その意味で好感が持てたのが、ロンドンでのノグチを扱う章で展開される夏目漱石との比較である。著者は、官費留学生としての重い責任の下にロンドンで暮らし、自分の殻から出ようとしなかった漱石と、まったくの自己責任で、期限も設けず、米英でアイデンティティを摸索しながら目標を追いかけたノグチを、「アウトサイダー」と「インサイダー」という言葉で比較する。このような比較の先に、ノグチ研究をより広い領域へと押し広げてゆくきっかけが見つかるのではないだろうか。

例えば評者は、帰国後に様々な分野で執筆を行い、「戦争協力者」というレッテルに甘んじるようになった晩年のノグチの姿から、やはり青年期にイギリスを訪れ、帰国後は政治的なものも含め精力的な言論活動を行った長谷川如是閑を連想した。またノグチへの協力を惜しまなかったボヘミアン・クラブと称される一派の若き芸術家たちや、彼の詩集を讃美したイギリスの好事家たちの存在は、後にアーサー・ウェイリー訳の『源氏物語』に熱中することになるブルームズベリー・グループを予告しているようだと感じた。どうやらヨネ・ノグチを、「しばし話題になり、やがて忘れ去られた異邦の詩人」と片付けてしまうわけにはいかないようだ。彼の周りには、何か強力な磁場が発生しているように思われる。